

島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS

2016.JUN



vol.37

い わ み も の
「企画展」
Suminono
暮らしを形づくる石見のやきもの



2016. 7.22 [fri]
⇒ 9.25 [sun]

CONTENTS

2・3 特集 企画展「いわみもの」

4 学芸員通信

5 展覧会通信

6 れきはく通信

7 古代セン通信

8 れきはくごよみ／お知らせ

企画展

「いわみもの－暮らしを形づくる石見のやきもの」

会 期：平成28年7月22日(金)～9月25日(日)(64日間) 休館日：8月16日(火)・9月20日(火)

会 場：島根県立古代出雲歴史博物館 特別展示室

開館時間：9:00～18:00

7月22日(金)は企画展開会式のため特別展示室のみ10:00開場となります

主 催：島根県立古代出雲歴史博物館、島根県古代文化センター

特別協力：石見陶器工業協同組合、NPO法人石見ものづくり工房、石州瓦工業組合

島根県西部、石見の国。豊かな土地の恵みと「石見びと」の手の力で生み出された「いわみもの」。その代表的存在である「石見焼」は江戸時代後期から始まり、明治時代後期から大正時代には日本各地で用いられました。また、作り手である石見の職人たちも日本各地に進出して技術を伝え、生活に欠かせない品々を生み出してきました。こうした長い歴史と伝統をもち、いまでも私たちの暮らしのなかにはしっかりと根づいている「いわみもの」。その歴史をたどりながら、地域ブランドの魅力と豊かな暮らしのありかたについて、あらためて見直す展覧会です。

・プロローグ「いざ!いわみもの」

・#1「集合!いわみもの」

石見焼をはじめとした代表的な「いわみもの」が集合します。

・#2「誕生!いわみもの」

九州・関西地方など各地の焼き物技術を巧みに取り入れ、石見びとの手により生み出された石見焼。その誕生の秘密に迫ります。

・#3「鮮烈!いわみもの」

石州赤瓦の町並みや石見焼・石州瓦を作った巨大な登り窯のある光景は石見を代表する文化的景観です。石州を象徴する鮮烈な色彩「赤」の魅力に迫ります。

・#4「躍動!いわみもの」

石見の職人たちは日本各地で窯を開き、陶器や瓦の生産を行いました。東へ西へと躍動した石見の「ひと」と「もの」を追跡します。

・#5「煌星!いわみもの」

日本各地の窯業地が近代化を推し進めた明治時代。石見焼が他産地と競争し、光り輝く産地の一つとなっていく道程をたどります。

・トピック「いわみもの」と民藝

民藝運動を展開した柳宗悦が石見で見いだした焼き物「喜阿弥焼」(益田市)を紹介します。

・#6「奮闘!いわみもの」

大正時代、石見の焼き物が誕生以来形づくってきた「暮らし」がどのように変化したかを紹介します。

・エピローグ「もっと!いわみもの」



浜田市指定文化財 諸国御客船帳 (清水邦行氏所蔵)



第1回内国勸業博覧会錦絵
[大日本内国勸業博覧会 製糸器械之図](株乃村工藝社所蔵)



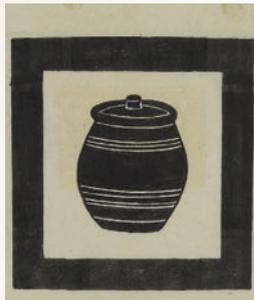
生活改善展覧会出品ポスター
「家庭の改良は先づ台所設備から」(国立科学博物館所蔵)

担当学芸員による見どころ紹介



大甕（石見陶器工業協同組合所蔵）

石見焼のなかで最も有名なのが赤茶色の甕「はんど」。石見焼の代名詞にもなっています。写真は高さが1mもある「大はんど」。ろくろを使わず成形し、登り窯でゆがみなく焼き上げてあります。職人の高い技術を示す大物です。



（左）喜阿弥糊壺

（右）芹澤銈介^{けいすけ}

《手仕事の日本 挿絵原画 石見喜阿弥 糊壺》

（日本民藝館所蔵）

民藝の父、柳宗悦が石見の地を訪れ高く評価した喜阿弥焼（益田市）。柳は糊壺を「可憐」と評しています。今回、糊壺や小蓋物、土瓶などを芹澤銈介の『手仕事の日本』挿絵とともに展示します。

企画展関連イベント

■関連講座①

平成28年7月30日（土）

「いわみものヒストリー」

講師：島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員 間野大丞／専門研究員 東森晋
島根県教育庁文化財課 専門研究員 矢野健太郎／特任研究員 中安恵一

■関連講座②

平成28年8月27日（土）

「海をわたった石見のやきもの」講師：阿部志朗 氏（浜田高校教諭）

■特別講座

平成28年9月11日（日）

「いまなぜ民藝か-素であること、その後」講師：鞍田崇 氏（明治大学理工学部専任准教授）

各講座とも

○時間：14:00～15:30 ○定員：各100名 ○無料（要申し込み）

○申し込み方法：電話・FAX・ホームページのイベント参加フォームのいずれかでお申し込みください。

■ギャラリートークプラス

学芸員による展示解説プラス1テーマ解説

8月20日（土）「石見焼・石州瓦のはじまり」

9月3日（土）「古文書にみる石見焼」

いずれも14:00～15:00

※時間までに特別展示室入口にお越しくください

※企画展観覧料またはミュージアムパスポートが必要です

■ワークショップ

いわみものフラワーアレンジメント教室

平成28年9月4日（日）14:00～15:30

講師：多々納和子 氏（装花作家・buis代表）

定員：20名（先着順）

参加費：2,000円（花器・花代込み）

○申し込み方法：電話・FAX・ホームページのイベント参加フォームのいずれかでお申し込みください。



常設展の展示替えをしました

常設展のうち、テーマ別展示室 青銅器と金色の大刀コーナーと、総合展示室 島根のたたらコーナーの展示替えをしました。是非、ご覧下さい。

テーマ別展示室 青銅器と金色の大刀コーナー

奥出雲町常楽寺古墳の馬形埴輪・人物埴輪は、出雲では数少ない古墳時代後期（6世紀後半）の形象埴輪として知られています。これまでは馬形埴輪・男子像埴輪を展示していましたが、新たに女子像埴輪を加えました。女子像埴輪は、頭の鬘を扁平な粘土板で作り、供物を捧げ持つような姿勢をしており、「鍔付きの帽子」をかぶった男子像埴輪とともに、松江市岩屋後古墳の人物埴輪との類似性が指摘されています。出雲の有力豪族が葬られた古墳の埴輪には、地域を越えた共通性がうかがえます。

また、この時期の出雲で盛んに作られた「出雲型子持壺」の展示も充実を図りました。須恵器子持壺は、親壺の肩に子壺をつけ、さらに親壺を器台にのせた形をしたものです。特に、出雲では親壺や子壺に底がないなど特色のある子持壺が見られ、出雲型子持壺と呼ばれています。出雲型子持壺は、石棺式石室とともに古墳時代後期における出雲東部の古墳祭祀を特徴づけるものでした。その祖形となる松江市増福寺20号墳の子持壺、典型例である松江市団原古墳・向山1号墳出土子持壺のほか、東西出雲の交流を示す出雲市出西小丸古墳の子持壺も展示しました。



常楽寺古墳の埴輪



団原古墳の出雲型子持壺など

総合展示室 島根のたたらコーナー

近年、発掘調査された出土遺物を中心に、島根の鉄及び鉄器生産の歴史を製鉄炉の炉壁や鞆羽口など「モノ」から辿れるよう展示替えをしました。このうち、出雲市古志本郷遺跡出土の羽口は、古墳時代前期（4世紀）のもので、日本最古級です。雲南市鉄穴内遺跡は、奈良時代（8世紀）の鍛冶遺跡で、鉄鋏・鑿などの道具類をはじめ、鋏・鋤先の未製品も出土しており、『出雲国風土記』に記述がある鉄や鉄器生産の様子を彷彿とさせます。雲南市大志戸遺跡の炉壁は、鞆から製鉄炉に風を送った送風孔が4つ以上残っており、中世の鉄生産技術をうかがうことができます。



鉄穴内遺跡の鍛冶道具など

特別展

「日本のわざと美」展
—重要無形文化財とそれを支える人々—

会 期 平成28年10月14日(金)～11月20日(日) (35日間)
 前 期：10月31日(月)まで 後 期：11月2日(水)から
 閉室日 10月18日(火・休館日)
 11月 1日(火・特別展示室のみ展示替えのため閉室)
 11月15日(火・休館日)
 会 場 島根県立古代出雲歴史博物館 特別展示室
 開館時間 9:00～18:00 11月は9:00～17:00
 主 催 文化庁・島根県教育委員会・島根県立古代出雲歴史博物館
 特別協力 東京国立近代美術館

「人間国宝」って、よく見聞きする言葉ではありますが、具体的に何のことなのか、ご存知でしょうか？
 工芸技術や芸能などの無形文化財のうち、特に重要なものとして文部科学大臣が指定したものを「重要無形文化財」といい、その技術を持っているとして認定されている人のことを「重要無形文化財」の「保持者」といいます。「人間国宝」はその通称です。

本展は、特に工芸技術分野の重要無形文化財の保持者・保持団体すべてについての代表作品を1点ずつ、一堂に展示し、それを支える技術として特に選ばれた選定保存技術の関係資料とあわせてご紹介するものです。

ぜひ多くの皆様にご覧いただき、日本伝統工芸の最高峰の「わざ」と、それが生み出す「美」に触れ、これらを支える技術についての理解を深めていただけたらと思います。

よし たみのり ゆうり きんざい つばきもんがざりざら
吉田美統作 釉裏金彩椿文飾皿 平成23年 文化庁蔵

吉田美統(1932～)は重要無形文化財「釉裏金彩」の保持者。本焼きして地色をつくった磁器の上に金箔の文様を置き、さらに上から釉薬をかけて焼き上げている。



釉裏金彩椿文飾皿

やまもとあきら きりばめぞうがんばんこ ひやっこう
山本晃 切嵌象嵌箱「白光」 平成8年 文化庁蔵

山本晃(1944～)は重要無形文化財「彫金」の保持者。本作で用いられている「わざ」=切嵌象嵌とは、金属板をモチーフの形に切り抜き、そこに異なる色の金属板をはめ込み、鑲付けで固定するもの。



切嵌象嵌箱「白光」

いろなべしまい まえもん ぎじつほ ぞんかい いろなべしまあかしまるもん もようかびん
色鍋島今右衛門技術保存会 色鍋島赤地丸紋模様花瓶 平成21年 文化庁蔵

色鍋島は、江戸時代、佐賀藩で焼造された色絵磁器。藍色の呉須で下絵を描き、本焼きをした後、赤・黄・緑で上絵をつけている。その独自の文様構成が特徴。



色鍋島赤地丸紋模様花瓶



友禅訪問着「精華」

もりぐち かこう ゆうぜんほうもんぎ せい か
森口華弘 友禅訪問着「精華」 平成元年 文化庁蔵

※期間中展示替えあり

森口華弘(1909～2008)は重要無形文化財「友禅」の保持者。友禅染は、防染糊を駆使して絵画的に染められるのが特徴。森口の作品では、日本的な題材が洗練された意匠と色彩によって格調高く表現されている。

きたむらしやうさい すいちようからはなもん ら だんはこ
北村昭斎 瑞鳥唐花文螺鈿箱 平成16年 文化庁蔵

北村昭斎(1938～)は重要無形文化財「螺鈿」の保持者。螺鈿は、夜光貝や鮑貝などを文様の形に切り取り、木地や漆地に嵌め込んだり貼り付けたりする技法。北村は文化財の保存修理に携わりながら厚貝螺鈿の技法を高度に体得し、本作のように独自の創作活動を活発に行っている。



瑞鳥唐花文螺鈿箱

さらに、重要無形文化財の保持者や選定保存技術の保存団体によって復元や修理がされた島根県内の代表的文化財を紹介する、特別企画も予定しています。ご期待ください。

館長新任挨拶

館長 栗原 昌子

このたび、当館の館長に就任しました栗原と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

長年、出雲から松江に通い、朝日・夕日がまぶしくなる時間の変化に季節を感じておりましたが、このたびの異動で大社に通勤する毎日が始まり、朝夕の弥山の姿に四季の移り変わりを知るようになりました。島根に暮らす楽しみが一つ増えました。

さて、私たちが学校で学んだ日本史では、銅鐸は近畿、銅剣・銅矛は北九州の文化で、その二つの青銅器文化圏が重なるところが私たちが暮らす島根だと教わりました。古墳とえば、前方後円墳や方墳くらいしか名前を知りませんでした。

しかし、教科書を通して得たこれらの知識は、荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡での大量の青銅器の発見や四隅突出型墳丘墓の研究等により、実は日本の歴史の、重要ではあるが一つの側面にすぎないことがわかってきました。

日本中の地域それぞれに、歴史や文化、伝統があります。なかでも、島根の地は古代から重要な意味をもつ地域であったことが、ここ数十年の間に、確かな証拠とともに明らかになってきています。

当館は、古代の出雲にとどまらず、石見、隠岐を含む島根全域の、古代から現代につながる歴史や文化を調査研究し、学習や交流の機会を提供することを目的としています。そして、私たちのふるさとの理解を深め、地域の活性化を図り、ひいては文化の発展に寄与することを使命としています。

重責ではありますが、一生懸命果たしてまいりたいと存じますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

アテンダント通信

出雲大社の参詣道「神門通り」ができた経緯を、皆さんご存知でしょうか？

2015年11月7日に、神門通りは100周年を迎えました。それを記念して、神門通りの歴史をより多くの方に知って頂こうと、私たち歴博アテンダントでプロジェクトを立ち上げました。その一つが『神門通り歴史絵巻』の制作です。

制作がスタートしたのは、100周年記念日まであと半年という時期でした。旧大社駅から出雲大社本殿までの約1.8kmの道のりを2名で分担し、神門通りの今昔を絵と詞書でつづります。

歴博のすぐ目の前にある神門通りでも、調べていくと知らないことばかり……。頭を悩ませながら構図を考え、現地を取材した資料や数少ないモノクロ写真などを頼りに、手探りで描き進めていきました。苦闘しながらも制作の過程で見えてきたものは、神門通りが重ねてきた歴史と、まちの人々の想いです。私たちの知らない神門通りに思いを巡らせることは新鮮で楽しく、貴重な体験ができました。

幸いなことに絵巻は好評を頂き、2016年4月16日から神門通りの一福様にて展示して頂いています。長さは5mありますが、お店など一軒一軒を細かく描いていますので、ぜひ近くまで寄ってご覧下さい。

時代ごとに様相を変えながら、参拝客を迎えてきた神門通りですが、今も昔も変わらない“おもてなし”のこころが溢れています。そんな神門通りの誇りある100年の歩みを、この絵巻からたどってみませんか？



島根県古代文化センター 新規研究事業・第4回古代歴史文化賞とHPの開設

島根県古代文化センターでは、将来古代出雲歴史博物館で展示・紹介するために、毎年2本のテーマ研究を開始しています。今年度開始のうちの1本を紹介します。

○たたら製鉄の成立過程（研究期間：平成28～30年）

島根県を含む中国地方では、砂鉄と木炭を原料とする鉄生産が古代から行われていました。室町・戦国時代には、製鉄炉が大形になり、鉄の量産が可能になったことなどから、国内で有数の鉄生産地となりました。近世には、中世の技術を基盤としてたたら製鉄が成立し、幕末から明治初期の最盛期には、中国地方で全国の鉄生産量の9割以上を占めるまでに発展しました。

さて、古代文化センターの基礎資料調査研究で全国の製鉄遺跡を集成したところ、鉄生産は古代には中国地方に限らず、東北地方から九州地方まで日本列島各地で行われていましたが、13～14世紀を境にして中国地方と東北地方に集約化されたことが明らかになりました。

本研究では、こうした基礎調査研究の成果を踏まえ、古代から中世にかけて各地で製鉄技術がどのように伝播したか分析するとともに、鉄やその

他手工業製品の生産と流通との関連性について検討し、出雲・石見地域における近世たたら製鉄の成立過程とその歴史的背景を解明したいと考えています。
(主担当者：専門研究員 東山信治)



隠地たたら跡3号炉（奥出雲町）
16世紀、高殿たたら成立以前の製鉄炉の地下構造。防湿・保湿のため、本床状遺構と小舟状遺構を設けている。

・第4回古代歴史文化賞選定作業の開始・ホームページの開設

古代歴史文化に関する優れた書籍を表彰する古代歴史文化賞ですが、今年も第4回目の賞の選定作業が開始されました。今後、10月下旬に候補作品の発表、11月上旬に大賞1作品、優秀作品賞4作品が選定される予定です。

また、この賞について広く情報発信するためホームページを開いたしました（アドレス<http://kodaibunkasho.jp/>）。こちらのサイトでは、古代歴史文化賞の概要、受賞作品の紹介、記念行事や主催5県（島根・奈良・宮崎・三重・和歌山）の古代歴史文化に関する情報等を掲載しているほか、受賞作品の読者が感想を投稿することもできます。



夏のイベントのご紹介

◆れきはく夏の体験楽「れきはく夏まつり」

【日時】7月24日(日) 10:00~15:00

【場所】古代出雲歴史博物館 体験工房周辺

【内容】

- 「オープン粘土でミニチュア“はんど”をつくろう」
※“はんど”とは、石見焼の甕のことです。はんど以外の器にも挑戦してみよう
随時受付 材料費：500円
- 出雲農林高校・古代出雲歴史博物館連携事業
出雲農林高校がやってくる！「移動動物園」「出農太鼓」
「出農チャレンジショップ」
- 藍染体験「藍染でオリジナルハンカチをつくろう」
100枚限定 材料費：300円
- 出張博物館 県内外の博物館が大集合
- キッズわくわく体験コーナー

※内容は変更になる場合があります。



◆夏休み子ども考古学教室 対象：小学校4年生～6年生

■「ドキ土器観察会」

土器の破片を観察して、博物館の展示品と比べて元の形や作られた時代を調べよう！

【日時】8月7日(日) 13:30~15:30

【場所】古代出雲歴史博物館 体験工房・展示室

【参加費】無料

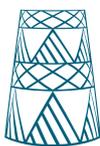
【定員】先着20名 ※保護者同伴可

【申込先】電話またはホームページのイベント参加フォームでお申込みください

※詳しくはお問い合わせください。



発行／平成28年6月



島根県立古代出雲歴史博物館
Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL.0853-53-8600(代) FAX.0853-53-5350
URL : <http://www.izm.ed.jp> E-mail : contact@izm.ed.jp
開館時間 9:00~18:00(11月~2月は、9:00~17:00)



マスコットキャラクター
雲太くん



マスコットキャラクター
出雲ちゃん